

松下幸之助記念財団 研究助成

## 研究報告

【氏名】 山崎 真治

【所属】(助成決定時) 沖縄県立博物館・美術館

【研究題目】 亜熱帯島嶼域への人類集団の進出とその環境開発技術に関する比較考古学的研究

## 【研究の目的】

本研究は、人類が亜熱帯島嶼域の開発に本格的にのりだした縄文時代早期～前期(約10000年前～5000年前)をテーマとして、人類の拡散・適応過程を比較考古学的視点から具体的に描き出すことを目的とするものである。本研究の主たる対象地域は沖縄・奄美であるが、本州～九州の温帯森林で高度な発達を遂げた縄文文化とそれを担った縄文人が、気候や生態系の全く異なる亜熱帯島嶼域への拡散・適応に成功しえた要因について、ほぼ同時期に人類集団の拡散・適応が認められている伊豆諸島や澎湖・台湾の事例との比較研究を通して考察を試みる。

## 【研究の内容・方法】

本研究は、①人類の資源利用形態の解明、②人類の環境開発技術の解明、という二つの柱からなる。具体的には、以下のような調査・研究を実施した。

## ① 人類の資源利用形態の解明

沖縄・奄美における縄文早・前期の遺跡を集成し、立地、周辺環境について現地調査を行った。沖縄諸島では、伊平屋村久里原貝塚、名護市大堂原遺跡、読谷村渡具知東原遺跡、嘉手納町野国貝塚、うるま市ヤブチ洞穴、同照間海岸、八重瀬町港川フィッシャー遺跡については踏査を、浦添市城間古墓群、同チヂフチャー洞穴遺跡については資料調査を実施し、南城市武芸洞遺跡、サキタリ洞遺跡では発掘調査を実施した。奄美諸島では、喜界町総合グラウンド遺跡、奄美市喜子川遺跡について現地踏査を実施し、宇宿小学校遺跡について資料調査を実施した。また、港川フィッシャー遺跡上部出土の汽水産貝(シレナシジミ)について放射性炭素年代測定を実施し、8098 C14 BPの年代値を得た。この年代値は、18000年前の港川人と、沖縄最古の明確な人類文化と考えられている約6000年前の爪形文土器文化の中間にあたるミッシング・リンク(空白期)に相当し、この時期の沖縄に人類が生息していたことを示す重要な証拠となるものである。

## ② 人類の環境開発技術に関する考察

沖縄の爪形文期の遺跡からは、真珠層の発達した貝を利用した鎌やナイフが出土することが知られているが、これらについて加工痕や使用痕の分析を実施した。対象としたのは、南城市武芸洞遺跡の爪形文土器包含層および無文土器包含層より出土した貝類標本(シュモクアオリ?)である。その結果、爪形文および無文土器包含層出土の貝類標本の一部には、明瞭な擦切痕が確認でき、両者に共通して真珠層の発達した貝を切断・加工し貝製利器の製作が行われていたことが判明した。このような利器は、九州の縄文文化には見られないもので、琉球列島に拡散した人類が新たに開発した技術と考えられる。この成果は近日中に論文にまとめる予定である。

また、縄文早・前期の沖縄・奄美における資源利用戦略復元作業の一環として、各遺跡出土の土器胎土と、土器の原料となる粘土、混和材の分布調査を沖縄、奄美の各地で実施した。その成果の一部は沖縄県立博物館・美術館紀要において発表した(山崎ほか 2011)。

【結論・考察】

現在のところ、沖縄における確実な人類文化は約 6000 年前までにしか遡ることができない。しかし、近年いくつかの遺跡において、6000 年前以前の人類文化の存在を示唆する証拠が発見されており、今回の研究においても、港川フィッシャー遺跡上部出土のシレナジミから、8000 年前にさかのぼる年代値を得ることができた。6000 年前以前の沖縄に、人類が生息していたことは確実であるが、その文化内容については不明な点が多く残されている。

一方、約 7000～5000 年前の縄文時代早期末～前期の状況については、今回、当該期に特徴的に見られる貝製利器の加工痕分析と、土器の胎土分析を実施し、一定の成果をあげることができた。すなわち、無文土器～爪形文土器文化期(約 6000 年前)に見られる貝製利器は、ともに真珠層の発達した貝を切断して製作されており、文化的な共通性が認められる。一方、このような利器は、九州の縄文文化や爪形文文化期に後続する文化には認められず、爪形文文化期とそれ以後では一定の断絶が認められる。土器の胎土分析からも、爪形文土器とそれ以後の室川下層式や条痕文土器には共通性は認められないが、遺跡近辺に分布しない原料使用しているという点では類似点も指摘できる。

以上のように、縄文時代早期～前期の沖縄・奄美の人類文化には、九州の縄文文化には見られない多様性と独自性が認められる。こうした現象は、九州からの人類集団の渡来という、単純な図式によって説明することはできず、島嶼環境に適応した在来の集団と、新来の集団との interaction に伴う文化変化の結果と解釈するのが妥当と考えられる。